

真・恋姫?無双～月と陽 ～

朱鎌蟹

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

それはまさに月と太陽の如き姿。

目次

始まりと日常

1

始まりと日常

く 始まりの章く

??? サイド

「親父!」

嘘だ…嘘だ嘘だ!! あんなに強かった親父が…あんなに優しかった親父が…敵の矢に当たり、倒れた。俺は無我夢中で親父の元に駆け寄った。

「親父!…しっかりしろよ! 親父!」

「……息子か……俺はもう駄目だ…娘の月のことは…頼ん…だ……ぞ」

「何言ってるんだよ! ……? 親父? 死ぬな、親父イ!!」

俺はそう呼びかけたが、親父は既に息を引き取っていた。

「……許さない……許さない! 親父の仇は…絶対討つてやる」

そう宣言した俺は矢が飛んできた方を向いてそう誓った。俺が目を向けた先、そこには特徴的な弓を持った、水色の腰まで届く程の髪をした将が立っていた。

◇◇◇◇

「懐かしい夢だ。」

実に何年ぶりだろうか、この夢を見たのは。

「今でも覚えている。親父の仇の姿……。この手で殺してやりたいのは山々だが「陽様」……何だ、明日」

「起こしに来たのですが……。どうやら必要なかった様ですね。半々刻後に定例会議がございます。」

「そうか……。分かった。すぐに向かう。おまえは先に行っている。」

「御意……。月様と詠殿は如何致しますか？」

「寝ていたら叩き起こせ。起きていたら用件を伝え、玉座の間に向かえ」

「御意」

そう言つて、我が軍の筆頭軍師、李儒―明日は俺の部屋から出て行つた。

「殺してやりたいのは山々だが、今は自分の役割を優先することにしよう」

◇◇◇◇

く李儒SIDEく

私の名は李儒。涼州の中にある安定という町の太守、陽―董旻様の筆頭軍師を務めております。私は今、陽様の妹君、董卓様と董卓様のお付きの軍師（見習いの文字が離せない）賈馱殿の寝ている寢室に向かっています。

私的には、兄であられる陽様が起こしに行つた方が良くと思うのですが、陽様曰く、

「妹といえど女性の寢室。断りなく入るのは、気が引ける」
だそうで。

「まあ、だからこそあの方に付いて行くのですが」と言っていたら、御二方の部屋に着きました。

「明日です。董卓様、起きていらつしやいますか?」

……返事がありません。どうやら、まだお眠りのご様子。心の中で失礼しますと言いながら戸を開ければ、案の定。二人はまだ寝ていました。仲良く手を繋ぎ合つて、微笑ましい光景です……と、いけません。二人を起こさなければ。

「董卓様、賈馱殿。朝です、起きてください」

ゆさゆさと揺すつても、声をかけても起きる気配は皆無。ならば、奥の手を使わせてもらいましょう。

「今すぐに起きなければ、……分かつているだろう」起きました!!ですから、お仕置きだけは!」な……なんだ、起きているじゃないですか」

「え?!お兄様は?」

「先ほどの声は、私の声真似です」

「あ、明日さん。お早う御座います」

「……もう、なんなの?月え」

「起きましたか？ 賈駆殿」

「あ、明日様！ 態々お越しに来てくださったのですか!？」

「ええ。陽さまのご命令で。あ、そうでした。半々刻後にある、朝の定例会議に出席せよと。」

「分かりました。急いで準備しますので、先に行っていてください」

「分かりました。くれぐれも遅刻せぬようにしてください。それでは、後ほど
そういつて、私は董卓様の部屋から出て、玉座の間に向かいました。」